

漢
和
畫
師
集

小 引

一、本書は墨附十一枚、半紙半折横形袋綴の寫本で、金地牡丹模様紺色表紙に、「漢和畫師集」の題簽が附けてある。

一、本書は「漢和畫師集」とのみ題するものの、その内容は前後二部に分れて居る。即ち前半八葉は所講漢和畫師集、後半三葉は「花之事」と題する茶道の記事である。茶道の記事は、こゝにはさしたる要を認めぬものの、試みに併せ掲げて原本の完全なる姿を示すこととする。

一、本書は單に覺書めきたるもので、筆者の名を明かにしない。裏表紙の花押も誰の所用かわかりかねる。たゞ、漢和畫師集を「日本之繪書名之事」「唐繪之覺」「中興繪之覺」「繪見様之事」の四章に分けたその第一、第二兩章の間に、天皇御歷代を擧げ、後光明院の御次なる百十三代の帝を、後水尾院とするかはりに、今上皇帝と記しまつるので見れば、おほよそ寛文前後の著であることが知られる。また此事は、本文の内容、書風、竝に金地紺表紙の體裁などと併せ考へて、此書が自著たると聞書たるとを問はず、恐らく原本か、然らざるも原本に近いものとして解すべきものなるを思はせる。さうして後半に茶道の記事を伴ふに見ても、著者は教養ある茶家者流の好事家などであらうと推せられる。

一、本書の主體たる漢和畫師集の内容は、それが零碎なる小篇であるにも拘らず、觀點によりては、なか／＼に興味深いものがある。畫人の傳記に關する著書は既にこの時代にもちらほらと見えるが、各畫家の様式に就て、ともかくもこれ程までに穿ちたる説を試みんとしたものは後にも無からう。今日よりすれば、その説いかゞと首傾けらるゝ節も少くないが、以て當時の鑑識を代表するものと爲し得るであらう。この意味に於てかの本法寺日通の等伯畫説と併せて、此書を世に推奨する者である。

一、本書を活字に附するに當りては、假名づかひ、濁點の有無などすべて原本のまゝに従ふこととした。人名其他の當て字もそのまゝに寫したが、字畫の誤や略字などは、おほかた正しき活字を充てた。また内題は原本には無いのを、體裁上添ふることとした。

一、本書は家藏本の一で、十餘年前東京に於て獲得したものである。

(協本)

漢和畫師集

日本之繪書名之事

一金岡カネノ さいしき繪六百年斗ニ成申候江戸
淺草にゑんま在之繪は黒馬なり
一信實シネノ 人丸かきなり四百年斗
土佐之内ニテ第一上手なり
一土佐ノ光信 三百年斗
一同光高 光信子
一兆典主テウテンズ 二百五十年斗
一周文シユブン 二百年
一慶書記ケイシヨキ 同周文弟子也
一相阿彌サノ上ノアミ 百八拾年斗
一能阿彌ノ上ノアミ 同
一雪舟セツシュ 百七拾年斗周文ノ弟子也
小栗ノ 小田原氏綱ノ時代也侍也
一宗丹 同
一山田道菴サンダウサウ 雪舟ノ弟子
同
上々古法眼 同
一元信 同
一伯信 古法眼父
中ノ上 雪舟ノ弟子分也
一雪村

堀之内也
周徳
雲溪中
等碩中
秋月中

後小松院二百二十年斗
後花園院百九十年
後土御門院百六十年斗
後柏原院百卅年
後奈良院百八十年斗
正親町院百八代七十余年
陽光院六十余年
後陽成院百九代五十余年
仙洞様百十代
新院百十一代
後光明院百十二代
今上皇帝百十三代

唐繪之覺

舜シユン 舉キョ 中 東トウ 破バ 中ノ上 下ゲ 華カ 光
物モツ 溪ケイ 子ス 昂ゴウ 李リ 仲チュウ 和カ
馬バ 遠エン 補ホ 之シ 中ノ上 王ワウ 元ゲン 章チャウ
夏カ 圭ケイ 物モツ 溪ケイ 弟子 默モク 庵アン 中ノ上

中興ノ繪之覺

李リ 龍リウ 眠メン 可カ 翁ウ
惠ケイ 崇ソウ 戴タイ 嵩スウ 文ブン 進シン 紀キ
翰カン 漢カン 日ジツ 觀クワン 林リン 郎ロウ
玉ギョク 澗カン 顔ガン 輝キ 芝シ 山サン
梁リヤウ 階カイ 所ショ 翁ウ 文ブン 興キョウ
正翁龍書也

繪見様之事

一 雪舟の筆やうはいかにもつよ／＼として下より筆をたて上るのぼせたる筆多し雲谷と印の内に有は入唐以前也等楊と有は入唐より後也雪舟とあるも入唐より後也墨色うすし

一 雪村の筆やう雪舟よりもなをつよ／＼としてかれ木のとし墨こく書事雪村のくせなり山水屋簾だゝくさにして遠近見へわけかたし但ゑんかうりすなとは筆こまかにしてうきたる筆有雪舟の弟子なり

一 ときはの鷹は目の玉をうるしにて書なり

一 狩野やうの人がたのかほはしもふくら也

一 土佐やうのかほはしもほそなり

一 はせ川やうはつよみをほんとしてかるくやさしき筆様なし

一 狩野やうはうつりをかるくやさしくしてつよくそげたる筆やうなし

一 相阿彌は筆のやうさたまらずしてつよきもありよわきもありはなにても鳥にても人ぎやうにてもそのものをほんとしてあひしらいおろそかなり山水なともいろ／＼の筆やうましりて人かたにはかたつかすいろゑは土佐やうのまなひてゑのぐをうすくつかへりたるまなとはがんひをまなひくわんおんはもつけいをまなひそれそれの物によりて筆やうかわるなり但いつれにてもあひしらいはかうらいゑのとくにてはん木のきのしたゑのとしちとしやくなるところあるへし墨繪にはかつかうのあしきにもかまわすわかまゝ

の筆やう有へしそれはきやうをほんとしてかくなり

一 しゆぶんは筆こまかに繪くとくして念を入たるなり山水なとにかならずあいらうをつかいたるやまにても木にても有へし

一 けいしよきはしゆぶんににて筆のきようありしゆぶんはこていなりけいしよきは大やうなり是はあいらうをつかはす但山水のくどき事は同事也筆あらめて墨付よき簾にうつりてうきたる所なしてうてんすはぐはんらい佛書にてよの人きやう書てもかほつき佛のめんそうのとくみゆるなり白き色繪をにくていにかほつきみゆる事なしよき人きやうはあさましくやせ／＼としてふくぶんの有人そうはなしこれをてうてんすのひてんなり

一 うんけいはなる程すみうすにして山水なとはみへかぬるほとなりいろゑは古法眼のとく又は相阿彌のとくにかくなり

一 秋月は雪村の少墨うすきものなり大かたは同じもの也上手なり

一 しうとくは雪舟の筆こまかなるものなり右三人ともに雪舟の弟子のうちの上手なり

一 をぐりの宗舟は筆やうけいしよきに同じ但けいしよきよりはこていに書也大ざわやかなる事なし但古法眼やうもまじる也

一 古法眼はからのかけい又ははゑんをまなひていかにも／＼筆こまやかにしてそさう成事なしんの筆つかいにてじちめなりさいしき上手也ゑのくよくつかへり人きやうゑことにゑもの也但人きやうのまなこいつれもまじり上りに書也そのゆへに人きやうのかはけわしくきつくみゆるなり

古法眼弟大かた古法眼にまかふ也
一 雅樂介はこほうけんより大まか也ゑのくうすし

一しゆんしやうほんけんは人きやうのかほとりたる也口をひろく書也こまやかにしておもくみゆる也ゑのくこくあつくしていやしきなり

古法眼惣領
一しやうゑいほうげんはうたの助にたり

一ゑいとくはこほうけんにもをとらすゑのくよくつかへり紙の時代にて見わけへしさいしきにはそかねつかふ事かつてなしほそかねをつかいたるはよの筆としるへし狩野家の人形のかほつきいづれも唐人のふうなり

一土佐やうのにんぎやうはたう人をかきても日本人のふう也

一からゑ日本繪の見わけやうの事日本繪はからの花鳥にんぎやう山川木立かきても日本のつねにみつけたるもののやうなり

一からゑは日本の花鳥人きやうのかほつきとはちかひてみゆる也是ひてんなり

一うつしゑはいわぐみしばくさ水なみ人形のひげかみにてみゆる也いかなる下手もわかまゝに書時はよくそろふ也いかに上手かうつしてもうつし繪はそろわぬものなり

花之事

一祝言之時虫クイや枝の損シタルヲキラフ

一冬の中は白キ花をキラフシラタマナトハキララ白梅不苦

一經筒ナト惣メ四角成花入は角カケテ置也薄板は四角ナルニハ丸キ板を用丸キニハ四角板を用

一鏢の蛙は五徳の一ツ爪の向フ方ヘカキ先モムケテ善シ又はアカル

之方カ下座の方ヘムケテヨシ

一客に花所望之時足打ニ見事に花のりんヲ前ヘなし置候はあしゝむさゝと花のりんも向ヘなり前々見事に不見候やうに置也足打ノ置所は花入の脇に手寄よき所ニ可置あし打トデメは向ヘ成候様におくべし

一貴人より被下候花入會せき過てから成とも茶過てから成とも水すいを持って出て水をすい花入もちて入候而水カケ又タイ持て出御相伴衆にみせ候みしまい候てより末座のもの床前ニ置其後亭主出て床の上へ上ル也

一道幸坊箱ヲテク、ツ箱ともいふ

一晚に短ケイは日入候移りを以テアカルキ物を置朝ハクラキ移ヲ以テアントント云

一ツユ五ツハカケ物之フウタイノフサ

茶入袋ノトンホウノ尾サ

茶杓之先

茶入之フタツマミノ上

唐之茶入之クスリ之中

墨付拾壹枚